

「あまたの言葉が世界を満たしますように」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 「神戸高校新聞」が面白くて

勝手にとても楽しみにしていたのです。この1年間、神戸高校の様々な活動を支えてくれた第79代自治会執行部から、第80代自治会執行部へと思いを繋ぐアセンブリー。それでも当日は雨が激しく降り、校内放送を通じての時間となりました。声だけ、言葉だけはやはり少し物足りないですね。眼差しを、顔つきを、そして立ち姿を見つめたかったのですが、それは叶わぬこととなりました。私も話を短いものに改めました。

『おはようございます。この時間はこれまでの自治会長とこれからの自治会長のお話を聴くための時間なので、私からは簡単に。まずは中山自治会長、本当にお疲れさまでした。そして個人的にはありがとう。』

神戸高校の校長には話をする機会が実に多く用意されます。そのたび私がいつも意識していたのは常に心に響く言葉を届けてくれる中山自治会長の存在です。私はいつも思っていました。「中山くんの前で今一つの話はできないな」って。彼のお蔭で何とか頑張れたかな、今はそう思っています。本当にありがとう。そして、中山くんをずっと支えてくれたこれまでの執行部の皆さんにもお礼を言いますね。本当にありがとう。

さて、新しい会長の鶴来くん。緊張しますよね。でも、幸い今日は雨です。古来から「旅立ちの日に雨はよいもの」とされています。雨は色々なものをきれいに洗い流してくれるとされているからです。不安、迷い、でもこの雨がすべて洗い流します。新しい執行部の皆さんも全校生徒もそして私たち教職員も応援しています。みんなでいい1年にしましょう、ということをお願いして、私からの言葉とします。』

鶴来くんは喉の調子が悪く、直前まで声が出ませんでしたがマイクの前では堂々たる話しぶりでした。また、中山くんは途中で感極まったことがとても印象に残りました。言葉には喩えようのない思いがあったのでしょうか。そして、この日もあなたの話は心に染み入る言葉と、立派な話しぶりでした。本当にありがとう。ふと、今年の文化祭。閉会式での矢野りさ子副会長の思いの籠った言葉が心に染み入ったことも思い出した私でした。



言葉が好きです。だから『第80代自治会執行部始動』と題された新聞委員会発行の新聞も隅まで読みます。副会長の長沼明里さん曰く「私の好きな言葉は『やらない後悔より、やって大成功』です。どんな事があっても大成功するまで挑戦し続ける、そんな1年間にしていきます」このような真っ直ぐな思いが好きです。

風紀委員長の小林嵐士くん曰く「我々に出来ることは、1人でも多くの方に『自分も善い行動をとりたい』と思ってもらえるよう自身の任務に精一杯努めること、そしてその姿を見せることだと思う。同じ高校に通う誰かのため自分自身と戦い続けたい」このような強い決意には身が引き締まる思いがします。

清美委員長の堀内琉生くん曰く「人の上に立つ身として、『人に指示やお願いをするときは、まずはその前に自らが誰よりも働く』という信条を常に大切にしていきたい」この決意にも身が引き締まりますね。

18歳のときには小学校の先生になるつもりだった私が、やんちゃな高校生達と出会い、「我が天職、ここに在り」そう思ったとき、私が所持していたのは高校の国語の教員免許でした。言葉が好きなんですね。というわけで今回は私と言葉との関係について触れた過去の通信を添えておきます。読んでくれたら幸いです。



第79代自治会執行部は数多くの言葉を遺してくれました。総勢69名もが集った第80代自治会執行部の皆さん。これからもあまたの素敵な言葉、期待していますね。

「さいはひあれと 祈るかな」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 78 回生に伝えなかったこと

過日、開催された県立高等学校のPTA連合会。その冒頭に県全体のPTA会長さんが発した一言は予想外のモノでした。「皆さんは年賀状を続けていますか？」と出席された方々に問われたのです。反応は様々でした。「もう辞めてしまった」という方もおられましたし、まだ続けているという方もおられました。

「年賀状はPTA活動に似ていると思うんです。かつては、あつて当たり前のものだったのに、近年いつからか義務のようになってしまった。もともとは気持ちからしていた行為が義務となると辛いですね。やっぱり楽しみだと思って、取り組まないといけないな、と思っています」そう会長さんは続けられました。

近年、PTAに加入していただける家庭が減り、活動が困難になりつつある学校もあると聞きます。そんな状況を踏まえてのご挨拶ですね。続いて学校側を代表しての挨拶を求められた私は、やはりアンサーソングで返すべきだなと思い、手元の原稿を端に置きやり、アドリブで挨拶をすることにしました。

「私は年賀状を『書く』派です。しかも2種類を用意しています。一方は親族や旧友あてに用いる家族名義のもので、もう一方はかつての教え子から届いたときの返礼用として用いるものです。最後に担任したり部活動を指導していたのはもう20年以上も前のことですから、彼らは皆、当時の私の年齢をとっくに超えてしまいました。それでも今も『先生扱い』してくれ、こまめに連絡をくれるので嬉しく思っているのです。『年賀状は人と人の気持ちの繋がり』ですよ。そういう点もPTA活動と似ていますかね」

過去の通信で、教え子からの年賀状をネタにして書いたものがあるので添えておきます。かつて私の学級通信や学年通信などを読んでくれていた教え子のうち、教職を選んだ者は同じように通信を発行しながら、クラス担任などをしているようです。それは気恥ずかしくもあり、嬉しくもあるものです。少なくとも言葉の大切さは伝え遺せたのかな、と思えるからです。そういうわけで卒業式でも私は78回生に伝えました。

皆さんが今後歩んでいく道においては、予測の難しい局面に多々出会うことと思います。その中においても皆さんには、想定外の事象とまっすぐに向き合い対応する力を育み、模範解答のない、正解の解らない不透明な未来を自らの手で切り拓き、地域を、日本を、そして世界を支える人材として組織や社会の中でリーダーとして活躍するとともに、愛おしい、自分ならではの豊かな人生を送って欲しいと願っています。

そのために『心がけてほしい生き方』のひとつは、「言葉を大切に生きていくこと」です。私たちは日々、様々なものに触れ、心が動きます。その心の動きをぜひ言語化する習慣をつけてください。「よかった」とか「よくなかった」とか、そのような言葉だけで日常を語ることはもちろん可能です。それでも年を重ね、やがて自身の歩んだ道を振り返る時、ひとつひとつの場面をそのどちらかの言葉でしか語れない人生は薄っぺらく、味気ないものと思います。一方で、豊かな言葉は日々を豊かにします。

そのときは何の変哲もないように見える一日一日を、いつの日か彩りも鮮やかに語れるよう、書物を読み、語彙を蓄え、目に映るものすべてを自分なりの言葉で記し残してください。そこに在るのはAIなどの人工的なものでは語れない、あなたにしか語れない、生身の自分だけの人生だと思うからです。皆さんには誰かに「語れる人生」を歩んでほしいと、そう願っています。

そうは言ったものの、私にはこまめに日記を書く習慣はありません。手帳にメモを残す程度です。ただ、過去の通信を読むと、そこには20代の私がいて30代の私がいます。今更ながら何物にも代え難い財産ですね。だから余計に願ってしまうのです。言葉を記し遺してねって。ともあれ78回生の皆さん、素晴らしい卒業証書授与式でした。ご卒業おめでとうございます。



「何年経ってもなりきれない僕」

高校教育課長
新谷 浩一

○ 教え子からの年賀状を見て…

「8年ぶりの中3担任です。時間がなくて最近の学級通信は私の言葉でなく、生徒の言葉ばかりです…」
「今年度は3年担任。とりあえず自分が18歳の時の担任の先生が書いた学級通信を読み返しました😊」
「2月からプレ出勤、4月から仕事復帰です。第2の初任のつもりで頑張ります😊」 「先生の紡ぐ言葉が好きだったので通信をまた読みたいです。『10年経ってもこんな気持ちで…』の歌も聴きたいです」

思わず唸ってしまいました。『10年経っても』の歌とは僕がクラス演劇のために作ったほぼ30年前の歌だったからです。しかも、この生徒は当時、僕のクラスではありません。校内ではそれなりに流行っていたみたいです。卒業式の日も、教室で中庭でと至る場所で繰り返し奏でた僕がつくった最後の歌。

○ 彼らが憶えていてくれる『10年経っても』の歌の背景

時は平成7年の夏、阪神淡路大震災のほぼ半年後に遡ります。僕が担任をしていた3年5組は文化祭でクラス演劇をすることになりました。オリジナル脚本を創るために我が家に有志が集まり、シナリオ合宿もしました。その作成中に主役の生徒が提案します。「先生、主題歌をつくってくれへん？」と。

僕が曲をつくり始めたのは高校生の頃です。仲間と始めたバンド活動。既成の曲に飽きた僕らは、やがて自分たちで曲をつくり、録音してはオーディションに申し込むようになりました。でも、音楽業界には認められませんでしたね。僕らは高校卒業と同時にそれぞれの道へ。エレキギターをしまいこんだ僕は、キャンプ場でギターをかき鳴らしながら子ども達と歌う、そんな普通の大学生になりました。

「久しぶりにつくるか」そう決めたら動くだけ。劇は合唱で終わる設定でしたから、印象に残りやすいよう『Aメロディ→A'メロディ→Bサビをリピート』と構成を決め音楽室へ。鍵盤を叩きながら主旋律を奏で、ピアノが弾ける生徒に五線譜に落としてもらいました。歌詞は18歳の詩を28歳で書くのが照れくさかったので、入れ込んでほしいフレーズを生徒から募集し、断片を繋ぎながら仕上げました。

朝が来るのを待ち続けて どれだけ泣いただろう 何のために生きているのか 答えがわからなくて
声をあげて笑う そんなことさえ忘れていた

通りで子どものはしゃぐ声 窓辺でずっと見てた ささいなことに優しい気持ち 感じてしまうのは
君を解るまではなかったことさ 君が僕を変えたんだ

踏み出す勇気がないと嘆く そんな毎日で 何が見える？ 何が変わる？ そんなふうには生きたくないのさ
10年経っても こんな気持ちで大人になれるなら 君に逢えてよかった

流れる月日は僕らをそれぞれの場所に運ぶ 耳を澄まし 瞳凝らし それぞれの光を探そう
星の瞬きを忘れるように見失ったもの いつか取り戻したい



僕は僕になるために 君は君になるために 惑いながら 怖れながら この場所を離れていくんだ
さよならさ さよならさ 果てしない道の前に 君に逢えてよかった 君に逢えてよかった

ギターコードどころか歌詞さえ忘れていた僕は古い通信を引っ張りだし、それなりに再現してみました。「先生っぽさが抜けませんね」周囲からそう指摘される度、僕はひとり思います。すべてはこんな些細なことを30年経っても憶えていてくれる彼らがずっと心の中にいるからだ。加えて20年経っても行政マンになりきれないこんな僕を温かく見守ってくれる事務局の皆様のお蔭でもあるんですね。